39 養蚕・製糸

■成長する製糸業と森田製糸所

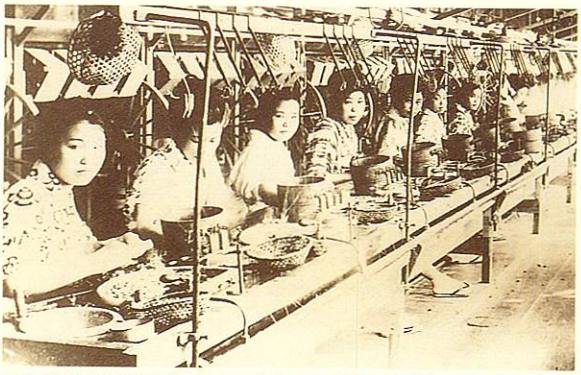
一八七三年（明治六）熊川村に、森田製糸所が森田浪吉（なみきち）によって創業された。東京府では最初の製糸工場である。浪吉は翌明治七年、座繰（ざぐり）（製糸機）五〇釜（五〇人取り）をもって生産した糸を横浜に送り、輸出業者と直接取引をした。明治十年代から二十年代にかけて、わが国の製糸業は政府の勧業政策と輸出の伸びに支えられて、順調な成長をみせた。森田製糸所はこのような状況を背景に、一八八〇年（明治十三）に工場を拡張し、この地方で最先端を行く一二〇人取りの器械製糸所となった。またこのほかには、福生村の笹本八十次郎による一八八五年（明治十八）創業の笹本製糸、一八九〇年（明治二十三）森田治作創業の熊川村の山八製糸、森田周蔵による山周製糸があった。

森田製糸所は一八九〇年（明治二十三）さらに工場を拡張し、二〇〇人取りとなった。生糸輸出の好調、それにともなう国内養蚕業の発展は、森田製糸所の業績を伸ばした。たとえば、森田製糸所の明治二十六年度の経営状況は、資本金二万円、経費総額三万二〇五〇円、収入総額四万五〇円で、八〇〇〇円の利益であった。当時の女

森田製糸所全景（大正期） 東方から製糸所を撮影、後方には多摩川、そして奥多摩の山々をのぞむ。大正３年、森田製糸工場の蒸気機関は二つで、16馬力、水力２馬力となっている。

工の一日の賃金が一〇銭から三五銭であったことから推定しても、その利益額は相当なものであった。

明治二十七年度の職工数は男子職工一八名、女子二七一名、そのうち十三から十六歳八四名、十七歳以上一八七名、ほとんどが二十歳前後の独身者で、男子五名は自宅から通勤していたが、残りはすべて工場内の寄宿舎での生活であった。寄宿生活は遠方（山梨・神奈川・埼玉県など）からの就職者が多かったからでもあったが、毎日の生活の監視、他工場からの引抜きを防ぐのに好都合であったからでもある。就業時間はふつう一日一四時間、最長一五時間、休業日は毎月一回であったが、ときおり臨時休業もあったようである。



森田製糸所の糸繰り場（大正14年）　大正期、女子職工が不足し募集に大変苦労した。各工場の募集員が女工獲得に奔走している。

一九〇二年（明治三十五）森田製糸所はさらに拡張され、四〇〇人取りとなった。当時多摩地方では、四〇〇人以上の者が働く工場は、巨大工場であった。動力が蒸気機関となったのは、このころと考えられる。それによって生糸生産高は、年間四万五〇〇〇斤（二七トン）に達するようになった。福生村、熊川村はまさに製糸の村であったといえる。

一九一四年（大正三）に始まった第一次世界大戦は、わが国に好景気をもたらした。生糸相場も好景気にわき立った。養蚕農家は蚕室を改築、新築したり、桑園には多量の金肥を投入して、養蚕業の拡大を図った。しかし一九二〇年（大正九）、生糸繭価は一転して暴落した。さらに一九二三年（大正十二）の関東大震災、一九二七年（昭和二）の金融恐慌そして世界恐慌へとつづき、養蚕農家も製糸業も大打撃をうけ、破産するものが続出した。

福生でも、昭和初期に相次いで製糸所が閉鎖された。森田製糸所も例外ではなかった。一九二七年（昭和二）五月、森田製糸所は組織を改め、資本金二〇万円の森田製糸株式会社としたが、その直後六月二十七日振り出した手形が不渡りとなって倒産した。明治初期から三代にわたってつづいた森田製糸所は、終焉を告げたのであった。

繭の搬入（森田製糸所　大正期）　生繭の買入先は出買と内買に分けられる。大正10年度の春繭の出買は6,661貫、内買は9,573貫と記録されている。

■開明的な女性・森田美知子

森田美知子は森田製糸所の創業者森田浪吉の長女として、一八六六年（慶応二）熊川村鍋ケ谷戸で生まれ、ツヤと名づけられた。ツヤは幼いころ父に聞かされる横浜の風景や外国人の話などに興味深く耳を傾けていた。小学校を卒業するころには、東京へ出て英語を習い、アメリカへ留学したいと思うようになった。ツヤは北多摩郡府中町（府中市）で漢学を学んだあと東京の神田へ行き、待望の英語を学んだ。当時地方から東京に遊学していた人びとのあいだで、新しい時代にふさわしい名前に改名することがはやっていたようである。ツヤも「艶子」に改め、さらに「美知子」と改名した。

美知子が神田で勉強を始めた一八八五年（明治十八）ごろは、鹿鳴館（ろくめいかん）時代といわれた時代で、日比谷につくられた鹿鳴館では、外国からの貴賓客接待のため、連日のように舞踏会が催されていた。この舞踏会にやってくる貴婦人たちは、当時ヨーロッパではやっていたバッスル・スタイルとよばれるドレスを着ていた。美知子はさっそくこのドレスを注文し着用した。

美知子はまた時代の先を駆け抜けたような女性であった。当時としてはかなり先端を行く社会運動であった芸娼妓廃止にも関心をもっていた。美知子が東京で暮らした明治十八年から四年間は、女性運動の高まりのなかで廃娼運動のさかんな時代であったが、残されている美知子の草稿からは、社会的な問題に大きな関心をもっていたことがわかる。

東京遊学中、美知子は埼玉県入間郡久下戸村（川越市）出身の東京専門学校（現早稲田大学）の学生であった奥貫退蔵と知り合い、恋に落ちた。奥貫退蔵の家は代々名主を務め、先祖に奥貫友山という仁徳の人を出している旧家であった。退蔵にとっては、美知子と結婚することは、すなわち森田家の婿養子となることであったが、退蔵は次男であったから、森田家にとっては、またとない縁組であった。二人は、両親はじめ親族の祝福のなかで、熱い恋愛時代を過ごした。

結納の式は、一八八七年（明治二十）十一月十三日に行われた。その後、美知子は熊川にとどまり、東京と行ったり来たりの楽しい婚約時代を過ごした。退蔵は東京専門学校卒業後、東京築地三十三番館のイギリス人博士サンマー氏について英語を学び、同時に下谷（台東区）の森春濤に詩文学を学んだ。結婚式は、退蔵が東京での勉学を終えた二年後の明治二十二年、熊川村の森田家で盛大に行われた。このときから、二人は森田製糸所の仕事に取り組み、父浪吉の大きな力となった。

一八九三年（明治二十六）四月、多摩三郡は神奈川県から東京府へ移管された。このころ退蔵は、父浪吉を助けて森田製糸所の経営に努力していたが、一八九七年（明治三十）一月に正

10代の頃の森田美知子　ツヤを名乗っていた頃の写真。

森田美知子着用のバッスル・ドレス（明治18年頃）　バッスル・ドレスというのは後ろ腰の部分を大きく後ろに張り出したスタイルで、ウエストを締めて胸部を強調したスタイルである（財団法人江戸博物館所蔵）。

また明治三十七年には、東京府農工銀行監査役に就任するなど、地方財界にも地歩を築いていった。

明治の末から大正時代は、森田製糸所の全盛時代であった。一九〇六年（明治三十九）には、アメリカのセントルイス博覧会に蚕糸を出品して銀杯（ぎんぱい）をうけ、翌四十年には、東京勧業博覧会に出品して一等賞牌を受賞するなど、その技術は高く評価されていた。また退蔵自身も、三十九年、蚕糸業発展の功により勲七等青色桐葉章を授与されている。さらに一九一六年（大正五）には、農工銀行頭取に就任した。

美知子は一八八九年（明治二十二）から森田製糸所の仕事に従事したが、仕事は生繭の仕入れと女子従業員の養成であった。良質の繭を鑑別して購入することが、製糸工場にとってはもっとも重要なことであり、美知子は細心の注意を払って繭を選別し購入した。また生糸の改良に留意し、従業員を蚕糸講習所に入学させ技術の向上を図った。優秀な女子従業員の養成にも積極的に取り組み、終業後読み書きを教えるなど、他の工場にはみられない配慮をした。

式に家督相続を届けている。退蔵は村民の信望も厚く、この年の七月には、福生村熊川村組合の村長に選ばれて、村政にもかかわることになった。さらに二年後の明治三十二年九月には、東京府会議員に選任され、地方政界にも進出した。

夫の退蔵が東京で活躍することが多くなると、森田製糸所の経営は、父亡きあとは美知子の双肩にかかっていたといえる。大正七、八年には熱海に別荘をつくったり、麻布に東京の屋敷を構え、製糸所の従業員も六五〇人を超えるなど、森田家は最盛期を迎えているかにみえた。しかし、一九二六年（大正十五）十一月三十日、美知子は永年経営に携わった森田製糸所の倒産を知ることなく、六十一歳でこの世を去った。

■高崎治平と養蚕業

明治時代から大正時代にかけて、養蚕の発展に貢献した高崎治平（たかさきじへい）は、一八五五年（安政二）福生村に生まれた。明治十年代、養蚕は生糸輸出の増加にともなって、全国的に発展をみせたが、その飼育法は旧態依然たるものであった。また一八八四、五年（明治十七、八）ごろは不況期でもあったため、農民の貧困を打開するためには、養蚕業の振興しかないと考えた高崎は、養蚕業の先進地である福島や長野、群馬などの各地を視察し、その技術を取り入れた。

高崎治平　明治43年12月、緑綬褒章が授与される。昭和11年に成進社同人、有志者たちによって頌徳碑が福生1300番に建てられた。

高崎は蚕種の改良を図り、福生村に共盛組（きょうせいぐみ）という組織をつくってその組長となって研究を重ねた。そして自家製造の新しい蚕種を希望者に無料配付して飼育させ、良好な成績をおさめた。共盛組結成三年後には、蚕種製造家二三戸、年産三万枚以上に達し、福生蚕種として好評を博したという。一八八五年（明治十八）には、福生村の多摩川沿岸の荒れ地を開き、桑苗を試植したところ予想以上の生育をみたので、有志を勧誘し数十町歩の桑園を造成した。

桑園の高崎治平　撮影場所不明。明治10年代後半、養蚕業の先進地である福島・群馬・長野などの各地を視察し、進んだ技術を取り入れようとする。

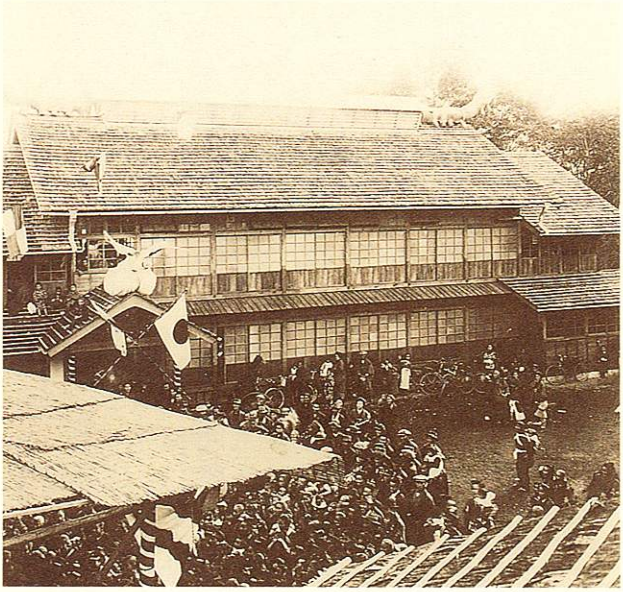
一八八七年（明治二十）には、羽村や秋川の人たちとともに、西多摩郡東部蚕糸業組合を組織した。また同じ年、私立微粒子病検査法伝習所を羽村に設けたが、高崎は進んでその検査法を習得した。その間にも、西多摩郡農工品評会幹事長、審査員、委員長、あるいは福生村の村会議員などにも選任された。

養蚕業改良のために、一八九〇年（明治二十三）西多摩村に創設された羽村の下田伊左衛門を社長とする成進社では、幹事長として東奔西走した。一九〇八年（明治四十一）成進社は西多摩村の下田蚕業講習所、郷地村（昭島市）の紅林、大神村（同）の石川、福生の高崎蚕業講習所と四つに分かれた。高崎はそれらを経ながら成進社の副社長を務め、一九二六年（大正十五）には、社長となってこの地方の養蚕業の発展に大きく貢献したのであった。

高崎のそれまでの功績に対し、緑綬褒章が授与されたのは、一九一〇年（明治四十三）十二月のことである。養蚕関係だけではなく、小学校への備品購入費の寄付、三陸海岸大津波罹災者への見舞金、日清、日露戦争従軍家族扶助、代田橋架設費、日本赤十字社関係、小学校新築費の寄付など、受賞後もこのような高崎の社会への貢献はつづいたのである。

一九二一年（大正十）関西地方を視察した高崎は、蚕種の人工孵化の研究をみてすぐこれを府下に導入した。これがこの地方で最初であった。人工孵化の導入により、同時期の掃立てが可能になった。一九二五年（大正十四）以後は『蚕友』という月刊誌を発行し養蚕業の啓蒙に努めた。一方一八九八

年（明治三十一）福生信用組合を設立し、組合長として三十余年にわたり組合事業の発展にも尽力した。一九三七年（昭和十二）二月十六日高崎治平はこの世を去り、葬儀は村民葬により、とり行われた。



成進社高崎蚕業講習所（大正期）　繭の品評会を開く。屋根に巨大な蚕、玄関に繭から出た蛾が飾られている。高崎治平の福寿館では春蚕種に小石丸、又昔の二種、秋蚕種として青熟、多摩の二種をつくり出している。

森田家三代のきもの

森田家から福生市に寄贈された衣服、服飾品などは、一九九〇年（平成二）から九三年にかけて一五七点、その後九四年（平成六）に一〇点が加えられて、計一六七点に及んでいる。

これらは、幕末から明治・大正にわたって森田家三代七〇年間に着用されたきもの類と服飾品である。

森田家は、一九四三年（昭和十八）に住居を熊川の別荘（現幸楽園）から武蔵野市に移住した。このとき大切な衣類や什器などは、別荘内の土蔵に保管されていた。

その後、土蔵内の収蔵品は武蔵野市の住居の物置に移された。一九八九年（平成元）衣類の多くが、福生市に寄贈されたのである。